保育者養成教育校の科目「子どもの保健」の授業研究

―アレルギー対応想定訓練での学び―

木村美佳　谷川友美

田園調布学園大学　別府大学短期大学部

研究の背景・目的

近年アレルギー児の増加とともに、保育施設や学校施設におけるアレルギー対応の研修の必要性が挙げられている。研修を行っても半年で記憶が薄れることや、保育施設内でのガイドラインが曖昧であることなど、子どもを主体とした保育の安全が確立できない現状が続いている。この研究の目的は、保育施設で子どものアレルギー症状出現時を想定し、学生が今後保育者として、自身の意識や行動力を自覚し次の課題を見出すことを目的とするものである。ただ大切さを伝えても個々の意識には繋がらない。自分の行動をさらに発展させ、適切な対応の必要性を広めることのできる保育者教育を探るための授業研究である。

研究の方法

調査期間は2019年11月21日〜12月13日。首都圏にある２大学で演習授業を実践、授業直後に指導、また授業後の振り返り用紙を元にオープンコーディングを行い、学生の意識・行動調査の質的研究を行なった。演習は、保育や学童等、保育・教育現場で起きたアレルギー事故の実例を参考にした。演習直後に学生一人ひとりに対する指導を行い、対応に取り組んだ学生全員に対し必ず讃えることを実施した。

結果

想定演習の実施で、知識があれば対応できると思っている学生が冷静さを失う。子どもを助けたいというような漠然とした意識では行動にはつながらず、一度の演習くらいでは適切行動にはつながらないことに気づく。保育者個々（全員）が判断・行動ができれば、子どもに負担のかかる対応を避けることができるという結果を学生自身で見つけられた。班毎の振り返りは、子どもの不安、担任の責務、職員同士の連携を疑似体験した学生がその意識を共有し、具体的な対応を実感しその必要性を学ぶことができた。

考察・課題

研修を行っても手順を正確に全て実施できる教職・保育職員はわずか10％~30%程度。保育者看護職の配置率が一向に上がらない調査結果からも、子どもの体調不良に対して保育者個人の意識向上は養成校の責務である。そして定期的・継続的な研修の基礎として、想定訓練を実施し、意識教育の機会を与えることは保育という場において意義があることが示唆できるであろう。失敗が許されるのは養成校の授業までである。しかし欠席者の存在もある。全員参加とはいえ、控えめ、また行動できずに終わる学生がいるのも現実である。今後も個々の学生に寄り沿える教育機関だからこそ、様々な想定を体験させ、学生全員に必要な意識教育を行える機会を授業をもってありたいと考えている。